防災士 結束へ機運

資格者増県内3472人
組織づくりで連携

県内市町村で「防災士」の組織化を図る動きが出ている。全国各地で大規模災害が相次ぎ、地域防災の必要性が高まる中、防災啓発活動や災害時の被災者支援を行う防災士の資格取得者が増加。一方で、防災士がいざというときに機能せず、自治会や自主防災組織と連携し切れないなど課題もある。組織化で連携を深め、地域との関わりを強化。「機能する防災士」を目指し、防災士が結束し始めた。

県防災士会と共同で行われた婦人防火クラブの避難所運営研修会＝水戸市青柳町

■生かす機会

「防災士になったものの、自分の力を生かす機会がない」。地域の防災士の声をきっかけに、龍ケ崎市は1月、県内に先駆け、防災士の連絡会を立ち上げた。

市は2016年度、市内の防災士約200人を対象に意識調査を行った。「自主防災組織で活動をしていない」との回答が5割を超える一方、組織化に「賛成」が7割に上った。その理由には、「災害発生時、組織化していなければ防災士の活動ができない」という意見のほか、情報共有や技術向上、防災士間の連携の必要性が挙がった。

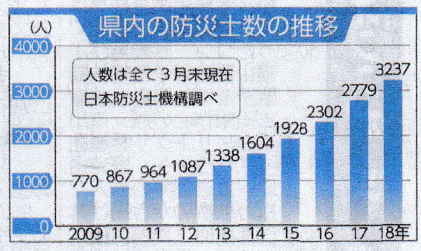
6月には発足後初の研修会が開かれ、会員約70人がそれぞれの地域の課題などについて意見を交わした。同会の斉藤恵理副会長(57)は「地域の防災士と顔を合わせて交流できることは大きく、連絡会ができて心強い」と評価。「1人で心細かったが、仲間ができてうれしかった」と手応えを口にした。市は今後、同会と市民の意見交換会を開く予定だ。

■小さな単位

防災士を組織化する動きが徐々に広まりつつある。龍ケ崎市に続き那珂市でも「防災士の会」が発足。関東・東北豪雨で被災した常総市でも7月、組織化に向け準備会が開かれた。いずれも地域に根差した活動を目指し、今後の活躍に期待がかかる。

一方、県防災士会(福島末輝会長)は「地域密着」を目指し、婦人防火クラブなどと連携し避難所運営研修を実施。防災士同士のネットワークを生かし、〝防災の輪〟を広げる活動を展開する。

同会理事の加瀬孝雄さん(68)は「防災士一人一人が地域にどう溶け込み、自分のスキルをどう生かすかが全国的な課題」と指摘する。「小さな単位で組織をつくることは地域への関わりの強化、お互いのスキルアップにつながる」と話し、市町村単位での組織化を後押しする。



■高まる意識

日本防災士機構によると、7月末時点で全国の防災士は15万2675人。このうち県内は3472人。東日本大震災以降、防災士になる人も年々増えている。受験資格が得られる県の「いばらき防災大学」の受講生数も右肩上がりで、修了生は7月で累計2千人を突破した。

防災士になる人も多様化している。県防災・危機管理課によると、以前は自治体職員や企業の防災担当、自主防災組織役員が多かったが、最近は若い女性など一般の人が資格を取得するケースが増えている。

(三次豪、松原芙美)

防災士　NPO法人日本防災士機構が認証する民間資格。防災意識の啓発や自助・共助活動の訓練、災害時に公的支援が到着するまでの被害拡大の軽減、災害発生後の被災者支援活動などが求められる。同機構が認証した研修機関が実施する養成研修講座を受講後、同機構が実施する資格取得試験に合格すれば資格が得られる。